
彼女の恋愛革命。

諒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の恋愛革命。

【Nコード】

N4830S

【作者名】

諒

【あらすじ】

私、遠藤春陽、22歳。ごくフツウのOLデス。ちなみに彼氏はおりません…。
毎日、お仕事、精一杯頑張ってます。頑張ってるんだけど、課長が意地悪で…？

突然、彼女の上司から思いを告げられた、恋愛感情にはちょっとおっとりしたオンナのこの、

彼を受け入れられるまでのお話（…の予定…）。

【5 / 5 完結済】

おかげ様で完結致しました。

拙い文章をお読み頂き、ありがとうございました。

登場人物（前書き）

お話の進行に合わせて、随時、追加・更新いたします。
ご了承ください。

登場人物

遠藤 春陽 <エンドウ ハルヒ> 22歳

営業部営業課所属。

入社3年目の事務職員。

仕事は迅速的確。だが、基本はおっとりとした性格。

営業課のマスコットの存在。

でも、実は結構オトコマエな面も。

早川 史弥 <ハヤカワ フミヤ> 28歳

営業部営業課所属。

入社6年目だが非常に優秀な営業社員のため、現在の肩書きは、営業課・課長。

取引先のウケもよく、また、部下の面倒見もいいため、周囲からの信頼は厚い。

なおかつ容姿端麗で、女性との噂は絶えない。

．．．．． 同僚の皆さん ．．．．．

佐々木 祥子 <ササキ ショウコ> 24歳

営業部営業課所属。

春陽の同期であり、気の置けない同僚。

（同期なのに年齢差があるのは春陽が短大卒の為）
早川課長に淡い憧れを抱いている？

伊藤 慎之介 <イトウ シンノスケ> 29歳

営業部営業課所属。

早川・希望の同期（早川とは中学から、希望とは大学からの友人）

。

春陽と同じチーム。大きなことから細々した事まで、
すっかり春陽に任せ、頼り切っている。

春陽にとって良きお兄さんの存在（だと自分で思っている）。

藤澤 希望 <フジサワ ノゾミ> 28歳

営業部企画課所属。

早川・伊藤の同期（大学からの友人）。

春陽が入社当時は人事課にいて、同期の中で
1人だけ年下の彼女のことを目に掛けていた。
春陽や祥子が姉のように慕う存在。

登場人物（後書き）

・	・
2011/4/26	2011/4/24
藤澤希望	伊藤慎之介
追加	追加

いきなり、なんですかっ?! (前書き)

初めての『連載』です。

お子ちゃまな文章だと思われませんが、宜しければお付き合ってください。

いきなり、なんですかっ?!

「おい、遠藤!」

その日は突然訪れた。

私、遠藤春陽。22歳。入社3年目の、どこにでもいる、フツウの事務職員デス。

今日も、いつもと変わらず、チームを組んでいる営業社員から依頼された

プレゼン資料を作成しておりました。

「はい、ご用ですか?課長。」

フロアの一番奥から私を呼ぶ声に、自席から立ち上がった。

早川課長。社内の女性社員は、その大半が憧れている存在。まだ30手前んだけど、社内一の花形部署で課長さんをされてます。

この歳で課長ですから、仕事はもちろん完璧。

取引先は言わずもがな、部下に対してもフォローはしっかりするし、物腰も優しい。

そんなだから当然部下からも信頼が厚い。

そして、見目も美しい。天は彼に二物を与え給いましたよ、ええ。身長は180を超えてるだろうなあ。。。で、すらっとした、か
とって、

決して痩せている訳ではない体型。

何か、スポーツでもやってるのかなあ．．．って感じ。
癖のないサラッサラの黒髪に、長い手足。
もう、纏ってるオーラが他の社員とは明らかに違う。

．．．でも、ほんと、女性には、苦勞してなさそう。
イケメン
容姿端麗ですからね、どうしても、ちよくちよく耳に入るんです、
課長の女性の噂。

やれ、どここの会社の秘書さんとイチヤイチヤとか、いや、社内の
誰々さんとムフフとか。

私的には、どんなにかっこよくても、どんなに仕事ができても．．．
と

思っております。

同期の祥子ちゃんは、よくウツトリした視線で見つめてたりするけど、
ど、

私は、気にしてないんです。どちらかというと、避けてるくらい。

．．．ていうか、私の意見なんてどうでもいいか。

「ちょっと、来い。」

ツカツカとその長い足でこちらまで来た課長は、不機嫌そうに
私の腕をつかんで、営業課のフロアから出ようとする。

「．．．！ま、待ってください、課長！」

ガシャン！

グイと強引に腕を引かれ、今まで座っていたイスに足を引っ掛け、
倒してしまった。

それでも気にすることなく、課長は私の腕をつかむ手を緩めずに、
私を引きずるように歩いていく。

ああ、イス倒したままだと、みんなが通るとき邪魔になっちゃう
よ．．．。

それにしても、私、なんかへましましたっけ．．．？

思い巡らせては見るものの、思い当たる節がまったく無い。
何がなんだかわけのわからないまま、引きずられるようにして
課長の後ろに続く。

．．．でも、一体どこへ行くつもりなんだろう？

「イタ．．．いです。かちよ．．．う。」

私は腕をつかむその力のあまりの強さにそろそろ限界を覚え、
消え入りそうな声で、目の前の広い背中に対峙した。
すると突然、それまでの勢いをなくして課長が立ち止まった。

「ああ、すまない．．．。」

振り返った課長は、何を焦っているのか、いつもの余裕はどこへや
ら。

「どうなさったんですか？ なんだか、課長らしくない．．．。」

「．．．遠藤。こっち、入れ。」

課長はそう言っ、今は誰も使っていない打合せ室のドアを開けた。

．．．スルーですか？ 心配してあげたのに．．．。

打合せ室は、その名の通り、打合せのために用意されている小さな
部屋。

会議用に、長机とイスくらいしかこの部屋には無い。

私は促されるままに部屋に入り、こんなところでないと話せない
用件が何なのかを聞こうと、課長に向き直った。

「あの．．．？」

不安げにそこまで口にしたとたん、私は今しがた閉められたドア横の
壁に押し付けられた。

「．．．．．あ！！」

思わず目を見開いて、私の両手首をつかんで、自身と壁との間に私を閉じ込めた課長を見上げた。

私の正面の窓ガラスから夕日が差し込み、ちょうど逆光になって、課長の表情が見えない。

何？何ナノ？一体何が、どうしたって言うの？

私、そんなに課長のお怒りに触れること、やらかしたの??

私は軽いパニックに陥ってしまった。

とにかく、課長のご用を聞き出して、早く仕事に戻らなくちゃ。

「あの、かちよ．．．。」

ここに連れてきた理由を尋ねようと口を開くと、温かい何かで唇が塞がれた。

すぐ目の前に、目を閉じた、いつも極力避けているあの整った顔がある。

．．．ということとは、この“温かい何か”は．．．課長の唇？

私、課長に、キスされてるのおっつ?!

いきなり、なんですかっ?! (後書き)

．．いかがでしたでしょうか？

文才は皆無に等しいため、カメ更新になると思われますが、憧れの連載モノ、完結できるよう頑張りますので、どうぞ、生あったか〜い目で見守ってやってください。

ご意見・ご感想、絶賛受付中 です。

．．が、申し訳ありません。当方、かなりのヘタレでして、誠に恐れ入りますが、お手柔らかにお願い申し上げます。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

した。

諒で

告白は、前触れもなく。

信じらんない！信じらんない！！信じらんない！！！！
なんで、私、課長にキスされなきゃならないのっ？！

私の目はあまりの驚きに開いたまま。

それに気づいた課長が、苦笑いしながら、私に言った。

「春陽．．．目え、閉じてくれない？」

「ほえ．．．？」

今、春陽って言った？

何で？何で？？何で？！

『エンドー』じゃないの？なんで『ハルヒ』なの？！

「今、『何でなの？！』って思ってるだろ？」

慌てふためいて必要以上の瞬きをする私に、さっきとは打って変わって、いつもの余裕綽々な課長が言った。

「ホント、かわいーのな？」

ずっと同じ体勢のままクツクツ笑う課長に、私はなんだか腹が立ってきた。

「いつ．．．一体何なんですかつ？！ご用って、何なんですかつ？！それと、いい加減、手、離してくださいっ！」

思わず、感情のままに、上司に怒鳴ってしまった．．．。

その声の大きさに、キョトンとする課長。

その姿を見て、自分のしでかしたことに気づき、青くなる私。

「嫌だ。」

課長は、ニヤリと怪しげな笑みを浮かべ、私を見下ろす。

その視線に嫌な予感を覚えて、私は視線を逸らすべく俯いた。背筋に冷たいものを感じる。

俯いたためにあらわになったうなじに、課長の熱い息がかかる。

「．．．好きだ、春陽。」

耳元で、囁かれた言葉。

^{テノール}低音の甘いその響きは、私の不必要に心臓を踊らせ、そして、^{バニック}脳内混乱に拍車をかけた。

え？何？今このヒト、何を言ったの？

体中が震えだす。．．．なんだか、スゴク怖い。

「な．．．なに言ってるんですか、課長？」

カタカタ震えながら、恐る恐る顔を上げると、その瞳^めに怪しげな光を宿らせ、課長はもう一度ニヤリと笑う。

「あれ？聴こえなかった？．．．それとも、別の言い方した方がイイ？」

その表情を見て、全身の毛が逆立つような感覚に陥る。後ろが壁で逃げられないのに、後ずさりをしたくなる。

「．．．俺のオンナになれ、春陽。」

課長は、再び私の耳元で囁き、首筋に口づけをして、私を解放した。とたん、私は、ヘナヘナと力なくへたり込む。

「落ち着いたら戻れ。」

課長はそう言って、打合せ室から出て行った。

。そうして、夕焼けで満ちた打合せ室には、私ひとりが残された・・・

告白は、前触れもなく。（後書き）

敢えて避けていた課長に『好きだ』と言われてしまった春陽ちゃん。
パニクるし、体は震えだすし．．．さあ、どうしましょう？

．．．取り敢えず、職権乱用とセクハラで、訴えちゃいましょうか
ね？

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

諒でした。

わからない・・・。

これは、悪い、冗談・・・よね？

課長が出て行った打合せ室で、へたり込んだまま、私は、呆然と天井を見上げた。そして、ついさっき、ここで起きた出来事を無かったことにするため、必死で念じた。

ありえない！ありえないっ！！ありえないっ！！
あの課長が、私を好きだなんてことは、断じてありえないっ！
きつと、これは、“罰ゲーム”か何かなのよ。ええ、きつとそう。
でないと、あの課長が、こんなこと言うはず無いもん。

何とか自分を奮い立たせようとするも、心臓のドキドキは
一向に収まる気配も無く、身体も力タカタと震えが止まらない。

なんでなの・・・？

何で、私に、そんな意地悪するの・・・？

気がつくつと、涙の筋が頬を伝っていた。

「・・・うつく・・・。」

グシャグシャに絡まる感情に、私は自分の身体を抱え、
声を殺して泣いた。

夕焼けで溢れていた部屋が、闇色に塗り替えられた頃、漸く、私は抱えていた膝を解き、立ち上がった。

「何なんだ、一体．．。」

ふう、と大きな溜息を一つ吐く。

結局、気持ちの整理がつかなかった。

就業時間をとくに過ぎた、こんな時間にならないと自席に戻ることができないなんて．．。

何も考えたくない。せめて、今日1日は。許されないことだろうか．．？

「とりあえず、今日は、もう帰ろう．．。」

重い足取りで、すっかり暗くなってしまった打合せ室を出ようとドアを開けると、そこには、壁にもたれて課長が立っていた。

「．．．．．！」

私はその顔を見て、咄嗟にドアを閉めたのだけれど、課長の長い足がそれを阻んだ。

「．．．なんで逃げる．．？」

あたりが暗くてその表情は窺えないけれど、その声は、間違いない不機嫌な色を滲ませている。

「．．．．．わかりません。とりあえず、課長には逢いたくないです。」

ずいぶんな言葉をつぶやき、私はチクチクと感じる
課長の視線から逃れたくて、俯いた。

盛大な課長の溜息が聞こえ、頭をクシャクシャと撫でられる。

「今日は、このまま帰れ。向こうの片付けは済んでるから。」
耳に心地よい低音の響きを残して、課長の足音は
私から遠ざかって行った。

わからない．．．。（後書き）

．．春陽ちゃんを打合せ室に籠城させてしまいました。

んで、まだ春陽ちゃんと俺様課長の2人しか人が出てきてない．．．

。おまけに、俺様は自分のやったこと、棚に上げてそ知らぬ顔だし．．

あゝあ、先行き、不安．．．（x|x;x）

拙作ですが、たくさんの方にお読みいただいているようで、
感激しております。

この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

今回もここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

諒で

した。

泣きたい夜。
(前書き)

暫く、春陽ちゃんの悩める日々が続きます・・・。

泣きたい夜。

あのあと、私は自席に戻ることなく、ロッカールームに向かい荷物を纏め、会社を出た。

一度、自席に戻ろうとしたのだけれど、営業課のフロアには誰かの気配があり、なおかつまだ電気が灯されていたから戻らなかった。．．．正しくは、戻れなかった。

課長が打合せ室を出てから、私の気持ちは鉛のように重いままちつとも浮き上がってこない。

かなりの長い時間メソメソと泣き続けていたし、きっと、色々とヒドイ顔にもなっている。そんな状態で、課長はもちろん、他の誰かにも逢いたくなかった。

「あゝ、なんて一日．．．。」

いつもより3時間近く遅い電車で帰宅し、バッグを玄関先でソファに向かつて放り投げ、そのまま部屋着に着替えることなく、寝室のベッドにダイブした。

『．．．俺のオンナになれ、春陽。』

ベッドの上で仰向けになり、白い天井を睨みながら、今日、何の前触れもなく突然起こった”事故”のことを思い起こした。

強くつかまれて赤くなり、開放されてからも暫く痛んだ手首は、もうすっかり痛みも赤みもひいて、今はなんともない。

だけど、今度は、なんだか氣持ココロがズキズキと痛い。

早川課長．．．。何のつもりで、あんなことを言っただろう？
お世辞にも仕事ができない私のことを、からかって楽しんでるの？
私が何をしたって言うの？

仕事でミスをした．．．？迷惑をかけた．．．？？

「．．．わかんない．．．。」

枕に顔を埋めて、盛大な溜息をつく。

重い気持ちは晴れることのないまま、時間だけが刻々と過ぎていく。

バッグの中に入れっぱなしだった携帯が着信を告げる。

重く感じる身体を引きずって放り投げたバッグを引き上げ、
ディスプレイで電話の相手を確認してから通話ボタンに触れた。

「．．．もしもし？」

『ハルちゃん？無事？！生きてるっ？』

携帯から聴こえる同僚の声に、ツキリと胸が痛む。

「．．．何？私、瀕死の重傷でも負ったの？シヨコちゃん。」

『生きてるのね？大丈夫なのね？？』

胸の痛みがチクリチクリと大きくなっていく。

「大丈夫も何も．．．。」

『だって、ハルちゃん、課長に連れ出されて、フロアに戻って
こなかったじゃない！一人で戻ってきた課長に聞いたら、

『気分が悪くなったらしい』なんて言うし、心配で心配で．．．。』

「．．．ゴメン．．．。」

消え入りそうな小さな声で、私は、祥子ちゃんに詫びた。
頬を涙が伝つていく。．．．イケナイ。私、泣いちゃ、ダメ。

『ハルちゃんは、ものすごく頑張りすぎちゃうコだから、
疲れちゃったのかもね？でも、ちよつと安心した。』

今日は、ゆつくり休んで。無理しちゃ、ダメよ？』

「．．．うん。ありがとう。」

祥子ちゃんは、『じゃ、また、明日ね？』と優しい声を
残して電話を切った。

いろんな感情がグルグルと渦を巻いて、自分が何を
考えているのか、わからなくなってきた。
でも、唯一つ。今の私がしたいこと。

その夜は、近くにあつたクッションに顔を押し付け、
声が枯れるまで泣き明かした。

朝は、また、来る。

いつの間にか眠ってしまったようで。

気がつくと、朝だった。

そして、目覚めはサイアクだった。

「・・・・・・・・・・。」

泣き明かして厚ぼったく腫れた瞼。カラカラに枯れてしまった声。きちんとベッドで眠らなかつたから、身体もますます重く感じる。昨日帰ってきてそのままの服には、嫌な皺がついてしまった。

「とりあえず、シャワー・・・・かな？」

左腕につけたままの時計を覗いて、出勤する時間までに十分な余裕のあることを確認したあと、昨夜、ベッドの代わりをしてくれたソファからムクリと起き上がった。

モヤモヤした気持ちも一緒に流れて行ってしまう！と、勢い良くシャワーを頭からかぶる。

その温かい飛沫は、ほんの少し、嫌な気分^{モノ}を持ち去ってくれたようだ。

チームのみんなに、どんな顔して、逢えばいい？

シャワーを浴びて、着替えた服を洗濯機に入れたあと、キッチンで淹れたコーヒーをすすりながら、昨日、仕事を放ったまま帰ってきて

しまった自分に、今更ながら、後悔した。

「ちゃんと、謝らなくちゃ．．．。」

私は時計を見て、いつもより1時間近く早い時間に家を出た。

会社までは、電車で20分。

随分と早い時間帯なので、いつも乗る電車と違い、車内の空間に余裕がある。

幾分振りに座席に座った私は、窓の外の朝の街を眺める。

窓から差し込む朝日が眩しくて、手をかざして目を細めながら、ほっと小さく溜息をついた。

いつもはあつという間の通勤時間が、今日はなんだか、とても長く感じられる。

．．．気が重い。会社に行くのが、嫌だ。

「．．．って、小学校の子供かいっ．．．!」

窓に映る自分に向かって、小さく突っ込みをいれて苦笑した。

電車を降り、最寄りの駅から、徒歩5分。

やっぱり重い気持ちをずるずると引きずったまま、歩いてきた。早い時間の営業課のフロアは、予想通り、まだ誰も出社していなかった。

私は、フロアの窓を開けて空気を入れ替え、給湯室で台拭きを固く絞り、営業課全員の机を、1つ1つ拭いていく。

メンバーの机を手前から拭き上げ、最後にフロアの一番奥にある課長席が残った。

『．．．俺のオンナになれ、春陽。』

机の前に足を進めたとたん、呪縛のようにその言葉が甦り、そこから一步も動けなくなる。

そして、心臓がザワザワと騒ぎ、身体が小さくカタカタ震えだす。

．．．ダメ、私。負けちゃ、ダメ。

大きく息を吸い込み、台拭きを持っている手に、グツと力を込める。

落ち着け、私。ダイジョウブ。大丈夫だから。

暫くゆっくりと深呼吸を繰り返し、気持ちを落ち着かせる。

何度も何度も繰り返すうちに、ざわめいていた心臓も、震えていた身体も、日常通りを取り戻した。

時計を見ると、ここに着いてから30分以上も過ぎていた。

「さっさと拭いて、片付けちゃいましょ！」

そう呟いて、課長席の机を拭くべく、右足を一步前へ、踏み出した。

朝は、また、来る。（後書き）

昨日、累計PVが3,000を、累計ユニークが700を超えました。

想像以上のたくさんの方にご覧いただけで、本当に嬉しいです。予想以上の数字に、顔が『にたあ』と溶けてます。

（（＊、＊）にたあ） こんな感じ？）

説い文章ですが、ご期待に適應しよう頑張りますので、どうぞ、これからも宜しくお願い申し上げます。

（・・・とりあえず、もう少し、シリアス（？））が続きそうですが、
・
・
・

また、ご意見・ご感想、誤字・脱字のご連絡もお待ちしております。
下さった方には精一杯の愛情を・・・（え？知らない？）（i
i）

それでは、そろそろ。

ここまでお付き合いくださったあなた様に、最上級の感謝を。

諒でした。

返せないこたえ。 (前書き)

初・連投(?!)、イキマス！

返せないこたえ。

すべての机を拭き終わったところで、フロアに誰かが入ってくる気配がした。

「春陽．．．。」

「お．．．おはようございます、早川課長。昨日は申し訳ありませんでした。」

震えて崩れそうになる感情を必死で抑えて昨日のお詫びをし、さりげなく

課長を避けてその場を去ろうと、足を踏み出した。

「待て。」

あともう少しで通り抜けられるところまできて、私は腕を掴まれた。「．．．なんですか？」

怖い、恐い、コワイ．．．。

課長が怖くて、顔を合わせられない。視線を逸らしたまま、私は答えた。

「昨日の返事、まだ、聴いてない。」

「．．．っ?!返事って．．．!」

カッときて思わず睨みつけると、真っ直ぐな視線とぶつかった。

なんて顔、してるの．．．?

曇りのない、済んだ漆黒の瞳。

それは、その奥に熱を帯びたような気配のまま、私を見つめる。

「．．．お答え、できません．．．。」

「．．．何故？」

「わからないから．．．。」

どうにかそれだけを告げて、腕を掴んだ手を振り払い、私はその場を足早に立ち去った。

「．．．ルちゃん？ハルちゃんっ？」

私の名前をその呼ぶ声に、私は現実引き戻される。

ぼんやりしていた意識を振り払うと、仕事で同じチームの伊藤さんが、

心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

「うわ、すみません、伊藤さん。ぼんやりしてしまって．．．。」

私は慌てて一歩後ろに下がり、頭を下げた。

「ん？いや、いいんだけど。身体、ホントにもう大丈夫なの？」

「え？」

「昨日さ、早川に引つ張られてったろ？あの後、ハルちゃん、席に戻ってこなかったしさ、早川に聞いたら、『体調が悪いようだったから、

医務室に連れてった』なんて言うし。」

あ、そうか。私の席外し、理由は体調不良になってたんだっけ。そういえば、昨日電話をくれた祥子ちゃんもそんなこと、言ってた。

「あ、はい。もう、大丈夫です。」

「いつもいろいろ頼んじゃうからだよねー、きつと。」

「いえ、そんな訳じゃ・・・。」

「よし、今日は、オレがお昼奢っちゃう！好きなもの食べていいよ？
何がイイ？」

伊藤さんは右手で作った握りこぶしを左手にパンと叩きつけ、『名案！』と

言わんばかりに私を見た。

「いとゝさあゝん。私いゝ、パスタが食べたいですうゝ。」

「しょ・・・祥子ちゃんっ？！」

その声に吃驚して顔を向けると、私の横に祥子ちゃんがいつの間にかいて、

ニコニコと笑っていた。

「ええゝ？だあって、祥子ちゃん、いつもオレに意地悪じゃん・・・。」

「・・・ヒドイっ。伊藤さんって、そんな方だったんですねっ？！」
さっきまでの笑顔は何処へやら、祥子ちゃんは瞳をウルウルさせて俯いた。

「わ、わ、わかったっ！祥子ちゃんもお昼、一緒に行こう！」

「やったあゝっ！いとゝさん、だあい好きっ！」

両掌^{りょうて}を上げて無邪気に喜ぶ祥子ちゃんを見て、伊藤さんは
がつくりと項垂れ、私はクスリと笑った。

返せないこたえ。（後書き）

ハイ、本日、新しい方が見えます。

『登場人物』の方にも大まかな設定を追加・更新しておきますデス。

初めての『2日続けて投稿』。

この先、多分、もう、ないと思います。

何事もノロマな私にしては、本当に快挙です、ええ・・・。

たくさんの方々にお読みいただき、とても嬉しく、そして幸せです。

ここまでお付き合いくださり、ありがとうございます。

最上級の感謝をこめて。

諒でした。

今までの『ワタシ』。

突然ですが、ぶっちゃけちゃいます。

自慢ではないですが、私は、今までにお付き合いをした男性はいません。

それは、なぜか？

この会社に入社するまで、俗に言う『オトコマエ』な女子だったらしいこと。

そして、中・高・短大とエスカレーターで進学できる女子校だったこと。

．．．だと思う。

昔から困っている人を見過ごせない性格で、おまけに、頼まれると嫌イイ』と言えない。

典型的な『姉御肌』タイプのそんな私は、周りからすると頼りになる存在だったらしく。

幼稚園の頃から、あちらで　　ちゃんが××君にいじめられていると聞けば、

その現場に飛んでいってイジメっ子達をやっつけ、こちらで　　ちゃん

ノートをどこかに置き忘れて見当たらないと聞けば、例えば日が暮れても

見つかるまで一緒に探したり．．．と、よくよく聞くと、ただのお節介焼きの

ような気もするんだけど．．．。特に女の子たちには、重宝されてたっけ。

そのせいか、バレンタインデーなんて、先輩後輩問わず、いくつチョコを

貰ったことが．．．。

．．．で、お約束のように、男の子たちには「オトコオンナ〜！」って、

嫌われてたのデス。

まあ、よっぽど物好きでない限り、自分に回し蹴りをお見舞いしよう

している女なんて、相手にするはずもないですね。フッフ．．．。

そして、私の通っていた学校は、お嬢様学校でもないのに、アルバイト

原則禁止という校則がありまして。

故に、外部の男性と知り合える場もなし。まあ、中にはこっそりとバイト

していた子たちもいたようですが．．．。

で、律儀に真面目に勉強に励み、校則を守った結果、全くと言って
イイ程

男性への免疫がないまま、短大を卒業することになってしまった．．
と。

短大卒業後にこの会社に入社して、今の環境に慣れるまで、恐怖と緊張でガチガチだった。

周りに今までにいなかった人種がワンサカいて（しかも配属先では女性より男性のほうが多いなんて．．．）、意識が飛びそうになっ

たことが、
一体何度あったか・・・。

おまけに、今更な人見知りのせいで、少し間の抜けた行動しかできずにいる・・・。

入社式で、緊張のあまり派手に転んだ私を見かけ気になっていたという

祥子ちゃんと同じ部署に配属されて、彼女と少しずつ話していくうちに、

この会社の人たちから見ると、私には『おっとりした性格のトロい新人』

というイメージができあがりつつあったらしく。

この際便乗して、このままでもいいのかな？、なんて思いだして。

誰かに頼られるだけじゃなく、誰かに頼りたい我が儘が抑えきれなくなっ

たのかもしれない。

与えられた仕事については別として、私が楽な『自分』^{わたし}でいられることが、

少し嬉しかった。

こういうのを、『計算高い』なんていうのかしら？

今までの『自分』を否定したいわけではないのだけれど、周りを気にして

今まで表に出てなかった『自分』だってあるわけで。

・・・そうして、3年目に入りました。

でもね？この間、男性に対する抵抗感は、やっぱり克服できていません。

一言で言うと、慣れない。

漸く『仕事なら、何とか』対応できるレベルまで到達できた様な気がするけれど、仕事が終わってしまうと、何気ない会話もままならない。

男女問わず、誰とでも仲良くできてしまう祥子ちゃんは、『もっと積極的に

行かなきゃ、ダメよ？』なんていうけれど。

それに、こんな私に興味のある男性ヒトなんて、いないと思うし。そう、いる筈がないのよ？

なのに・・・。

わからない・・・・・・・・。

早川課長は、どうして、あんなこと・・・。

わからない・・・・・・・・。

今までの『ワタシ』。(後書き)

今回は少し短めでした。

あ、全然『オトコマエ』感が表現できてない・・・orz。

・・・なので、お詫びの気持ちを込めて（　なんて有り難迷惑な・・・）

今日はもう1本、あげてみたいと思います。

引き続きお付き合いいただけると、ワタクシ、嬉しさのあまり、尻尾ブンブン懐きます（　いい加減にセイっ！！　＼（　ー　；　）　）。

諒でした。

【4 / 26　20：05追記】

昨夜、UP直前の活動報告にも【追記】として記載致しましたが、本文をゴツソリ差し替えさせていただきました。

昨夜UP分より長くなってしまうましたが、話の流れには影響ないと思っています。

（ご意見・ご感想、誤字・脱字等のご連絡も、引き続きお待ちしております。）

書き直しても、それでも、春陽ちゃんの『オトコマエ』度あまり上がらず・・・。

．．すみません、ボキャブラリー限界です．．orz。
お許し下さいませ．．．。(ノ、)。。。

諒でした。

あの日、から。
(前書き)

2 話連続投稿、いきます（・・・）く。
宜しければお付き合ってください（・・・）m（ー）m。

あの日、から。

あれから1ヶ月が過ぎた。

課長は、あれ以来、何も言っていない。
それどころか、端にも近づく^{そば}かない。

テーブルに頬杖をつき、ほう、と小さな溜息をついた。

「ハルちゃん？溜息つくと、幸せが逃げてくのよ？」

暖かな陽射しのさす昼休みの社員食堂の隅っこで、一人ぼんやりと
していたところに、不意に背後から声^{うしろ}がしたかと思うや否や、
抱きつかれた。

「うわああ！」

「何？！その色気の欠片もない反応・・・。」

「慎ちゃん、年頃の乙女に、それ言っちゃダメ。」

「藤澤さあ、『慎ちゃん』はよそうや？」

「だあって、名前が『慎之介』なんだから、慎ちゃんでしょう？」

振り返った私は、目の前で繰り広げられるキラキラコンビの口喧嘩
に、

呆気にとられる。

「ん？ハルちゃん、お口、閉めよつか？」

「・・・すみません、希望先輩^{のぞみ}。」

空いていた隣の席に、企画課の希望先輩が座る。

伊藤さんは、私の前に陣取った。

「・・・で、その溜息の原因は何？おねえさんに話してみなさい？」
少し背を反り、軽く握った右手でトンと胸を叩いて、希望先輩は私を見た。

少し栗色がかったふわふわの髪。クッキリ二重の深い茶色の瞳と
形の良い薔薇色の唇。中央には高すぎず低すぎもしない鼻。

えもいわれぬバランスで整えられたそれらは小さな顔に収められ、
初めて見る男性社員は必ずといっていい程骨抜きになると言う。

「慎ちゃんがね、心配らしくって。私に泣きついて来たのよねえ。」

「藤澤あ、即刻『慎ちゃん』は止める。んで、オレは泣きついてな
んかないぞ？」

ニコニコと笑いながら言う希望先輩をムツとした顔で睨む伊藤さん。
こちら也希望先輩に負けず劣らぬ美男子で、目尻が少し下がった
優しいその瞳に映された女性は甘い色の溜息をつくといった噂が、
かつて真しやかに流れていたらしい。

そういえば、2人とも早川課長とは大学からの親しい友人だと、
誰かから聞いたような気がする。

・・・話して、みようか・・・？

フツとそんな考えが頭を過ぎった。

黙ったままの私に、伊藤さんが小さな声でたずねる。

「・・・早川がらみか？」

私は、その声に、目を丸くして顔を見た。

「わっかかりやすいのなあ、ハルちゃんは。」

クツクツ笑いながら、伊藤さんは右手を伸ばし、1ヶ月前の課長の
ように

私の頭をクシャクシャと撫でた。

その仕草に、私は顔が熱くなるのを感じ、再び俯いてしまった。

「...ぬうつ、許さんっ！私のかわいいハルちゃんに、一体何して
くれてんだか、あの馬鹿はっ！！」

地の底から響くような声の希望先輩の呟きに、ギョツとしてそちら
を向く。

この会社で、あの課長を相手にこんなことを言う女性メ性は、この人し
かない。

「大丈夫、おねえちゃんが、仇をとってあげるからね？」

私の両手を自分のそれでそっと包み、優しい微笑を浮かべた希望先
輩がいた。

「あ、あのっ！あの、敵討ちなんてっ！」

私は慌てて希望先輩の手を握り返した。

「敵討ちなんて物騒なこと...。」

そこまで言つと、あとは喉が詰まったかのように何も言えなくなっ
て、

2人から視線をそらせた。

すると、右肩に暖かな手が添えられ、きゅっと優しく抱きしめられ
た。

「泣かないで？『仇をとる』なんて、ちょっととした冗談だから...」
。

頭の上から希望先輩の穏やかな声が聴こえ、私の涙腺は、その言葉
に反して、
涙が零れるのを留めることができなかった。

あの日、から。（後書き）

長々とお付き合いいただき、ありがとうございます。

本日、新メンバー登場です！

このあと、『登場人物』に追加してまいります。

前回の伊藤さんの時は、すっかり追加忘れてしまいました、
今度は大丈夫（なハズ・・・）（ー；） 自信無）。

いつもお読みいただきありがとうございます。

ご意見・ご感想、拍手、その他諸々、とっても嬉しいです。

ここまでお付き合いくださったあなた様に、最上級の感謝を込めて。

諒でした。

静けさと、緊迫。

あの場面のあの言葉で顔^{セリフ}を上げれば、肯定していると同じ。

．．．今なら、冷静に判断できるのに。

医務室のベッドに横になって、今日、何度目かの溜息を零す。

一度決壊したが最後、なかなか涙の止まらない私を見て、希望先輩^{のぞみ}は、

食堂に伊藤さんを残して私を医務室へと連れてきた。

「暫くここで休んでなさい。私、自分の段取りをして、すぐ戻ってくるから。」

ハルちゃん、伊藤君がいたら話せないみたいだし．．．ね？」

そう言って、私の返事も聴かず、希望先輩は自分の持ち場に戻っていった。

「．．．もう、何やってんだろ、私．．．。」

また、目頭がじんわりと温かくなり、息がグツと詰まる。抑えようにも抑えられない涙。

いつから私は、こんなにも弱くなったんだろう？

チームのみんなに迷惑をかけて、先輩たちにも心配かけて．．．。

ベッドに横になってタオルケットを頭から被り込み、膝を抱えて丸くなった。

カラカラカラ．．．。

医務室の引き戸が静かに開けられる音が聞こえた。

「．．．うん？」

希望先輩が戻ってきたんだろうか？

すつぱりと包^{くる}まった暖かなタオルケットの中でウトウトしかけていた意識を

戻そうとしていると、明らかに女性のものとは思えない大きな掌が、壊れ物を扱うかのように優しく頭を撫でた。

「．．．すまない。」

タオルケット越しに聴こえたのは、早川課長の声だった。

私は身動きもせず、ギョツと目を瞑って、眠っている振りをした。

何故、私が、ココにいるのを、知っているの．．．？

纏わりついていた眠気は既にどこかに消え去り、タオルケットの中で、

私は身体が震えるのを抑えるのに必死だった。

しん、と物音一つしない医務室で、自分の心臓の鼓動^{おと}だけが酷く響く。

本当は聴こえるはずのないその音が、課長の耳にも届きそうで怖かった。

課長はベッドの傍らで様子を見ていたようだったけれど、私が眠っていると思ったのか、

暫くすると医務室から出て行った。

緊張が緩んだとたん、嫌な疲れがドツと押し寄せる。

もぞもぞとタオルケットから抜け出たその瞬間、再び医務室の引き戸が、今度は勢いよく開けられた。

「ハルちゃんっ！」

「せ、先輩?!」

引き戸を開けるや否や、希望先輩はベッドまで駆け寄り、私をムギユツと抱きしめた。

「今、早川がココから出てったけど、なんともない?大丈夫?!無事っ?!」

先輩はその腕に力を込め、私はその強さに苦笑すると同時にホツとした。

「うぐ...。さっきまでは大丈夫でしたけど、今は大丈夫じゃない...かも?」

冗談交じりにそう言うと、先輩の顔から一瞬にして血の気が引いた。

「え、えっ?!...ダメ、やっぱり、敵討ち!早川^{アイツ}に果たし状叩きつけて、

ケチヨンケチヨンに伸してやるっ!」

先輩は、青い顔をしたかと思った次の瞬間、今度は真っ赤な顔をして拳を突き上げた。

その姿を見て、私はその先輩の右手を握り締め、慌ててなだめる。

「嘘です、嘘ですっ!なんともないです!!大丈夫ですうっ!」

...ああ、自業自得...

静けさと、緊迫。（後書き）

姉御肌な希望さん。

皆から好かれている、ステキな“おねえさん”です。

さっきまで予約済になった第9話（この回）が突然消えてしまいました（。m。;）。
第10・11話の予約が済んだあだったので、慌てて「割込み」

で投稿。

第9話っ！何処へ行ってしまったのう？（i i）

．．．ということで、今日は、3話纏めてUPです。

学習能力、どっかに落としてきたのかも．．．。

拾われた方、おまわりさんに届けておいて下さいねっ！（o^_^）

b

（ 軽つつつつっ！！ ）

諒でした。

『あの日』の告白。

「んもう、意地悪はイケナイんだな、ハルちゃん。今度やったら、お仕置きよっ?」

希望先輩はそう言いながら、親指と人差し指で私の左頬をキュツとつまんだ。

「ふあい、もうひまへん、ほめんなはい（はい、もうしません、ごめんなさい）。」

私は目にうつすら涙を浮かべ、必死で許しを請うた。

先輩はそんな私をみて、満足気に頷き、にこりと微笑んで右手を離した。

「・・・で、早川^{アイツ}に、何をされたの?」

次に口を開いた瞬間、先輩の表情がスツと変わった。

「慎ちゃんがこんな心配して、アタシに話す位なもの。『何でもない』はずがないわよね?」

真剣な眼差しが、私を捉えて離さない。

「・・・ヒトってね?誰かに話すだけで、気持ちが少し楽になることもあるのよ?」

声色は優しいのに、なぜか、ズキリと胸が痛む。

私はその視線と意思に耐えられなくなって、俯いた。

胸が詰まって、苦しくて、息ができない。

ふるふると弱々しく震える私の肩に、先輩はそっと手を置いた。

「・・・今から1ヶ月くらい前・・・」

私は両手で顔を覆ったまま、重い口を開いた。

最後までどうにか話し終えると、嗚咽を抑えることができなかった。
苦しかったの。辛かったの。

どうしてなのか、わからなかったの。
どうしていいか、わからなかったの・・・。

泣きじゃくる私を、そつと優しく抱きしめて、先輩はポツリと言った。

「ハルちゃん、よく頑張ったね？辛かったでしょう？女のコにこんな思いを

させるなんて、早川はホントにひどい男ね？・・・でもね、庇うわけでは

ないけれど、アイツは今までこんなにひどいヤツじゃなかった。少なくとも

大学時代は。」

その声の哀しさに、私はゆっくりと顔を上げて先輩を見た。

「あの風貌みでくれでしよう？大学の頃も、相当引く手数多あまただった。

でも不器用でね・・・それは今も変わらない。だけど、こんなに強引なこと

するようなオトコじゃなかったよ。女のコを傷つけるヤツじゃなかった。

どうしちゃったんだろうね、アイツ・・・。」

遠い目で哀しげにそう言って、笑った。

コン、コン、コン。

医務室の引き戸をノックする音が聞こえた。

「．．．ハルちゃん、いますか？」

小さいけれど、私の存在を確認する声が聴こえる。

希望先輩の手でカバリと開けられた引き戸の向こうに、泣きそうな顔をした

祥子ちゃんが立っていた。

「祥子ちゃん．．．。」

「どうしたの？祥子ちゃんまでそんな顔して？」

先輩が祥子ちゃんに声を掛ける。途端、彼女は声を上げて泣き出した。

「先輩、どうしよう．．．。課長と、伊藤さん、フロアで大喧嘩しちゃって、

2人とも出てっちゃったの！」

「え？」

「喧嘩？」

私と先輩は顔を見合わせた。

2人が喧嘩したときの状況を、祥子ちゃんは涙声で一生懸命話してくれた。

課長にお得意先のお客様があり、その対応中に伊藤さんが課長を呼び出したこと。

課長が伊藤さんと、応接室から離れた、奥の会議室で言い争いをしていたこと。

その声が、いつもの2人らしくないほど大きかったこと。

そして、会議室から何かがぶつかったような大きな物音が聞こえた

こと。

直後に伊藤さんが会議室を飛び出していったこと。
少しおいて、課長が応接室に戻り、お客様が帰られたこと。
お見送りをした課長も、そのままどこかへ出てしまったこと。

私にはその状況が信じられなかった。

いつも冷静な伊藤さんや課長のそんな姿を、思い浮かべることすら
できなかった。

「うーん、なんとなく状況は読めたけど。で、2人には、連絡つ
いたのかなあ？」

「それが、2人とも、全然、携帯繋がらなくて・・・。」
祥子ちゃんこすは赤く腫れた目を擦りながら呟いた。

「あ、ダメよ、擦っちゃ。それにしても、社会人失格ね。」

先輩はとても冷静に祥子ちゃんの手を止め、はあゝと溜息をつき、
呆れたように言った。

『あの日』の告白。（後書き）

すみません．．．m（　　）；m

サブタイトル、イイ言葉が浮かびませんでした。

本日、もう1話続きます。

なんとなく、キリがいいかな．．．なんて思いまして
お時間のある方、宜しければ、お付き合い下さい。

諒でした。

憶測から確信へ。

医務室は少し重い空気につつまれた。

「伊藤さんも、課長も、一体何処へ？」

不安げに呟く祥子ちゃんの横で、希望先輩が携帯を覗く。のぞみ

「ああ、きたキタ。うん、心配要らないわ。早川、慎ちゃん捕まえたって。」

「へ？」

気の抜けた声を発して、私は先輩を見た。

「捕まえた．．．って。」

祥子ちゃんも、驚いた様子で先輩を見る。

「2人とも、早川と慎ちゃんとアタシは、大学の頃からの付き合いだっ

言っ

私

「早川と慎ちゃんはね、もっと早くて、中学時代かららしいよ？あ、でも、

同期と言えるようになったのは、大学からだけど。慎ちゃん、あれでアタシ達より1コ上なのよ。ホンっと、大人気ナイよねえ？」

もーやんなっちゃうわよねえ、とカラカラ笑いながら希望先輩は私たち2人に言った。

「祥子ちゃん、目、落っこっちゃうよ？」

先輩のその言葉に祥子ちゃんを見ると、驚愕の表情のまま、身動きひとつせず、立ち尽くしていた。

「あの2人ならダイジョブ。心配かけちゃったね？祥子ちゃん。

「アリガトね？」

未だ固まっただまの祥子ちゃんをそつと労わるように抱きしめる先輩を見て、私は安堵の息を吐いた。

「あの、先輩。」

私は、祥子ちゃんを営業課のフロアまで送り届けた先輩に声を掛けた。

ん？、と微笑みながら振り返った先輩に私は続けた。

「さつき、状況は読めた、つて……。」

「あ、それ？うん、喧嘩の経緯。」

「先輩、教えてください。私……。」

「本人たちからの方がいいわね？私から言うべきことではないから。」

言い終わらないうちに口を開いた先輩の、いつもとは違うその雰囲気^{オー}に、

戸惑いを覚える。

「どうする？呼ぶ？もうそろそろ戻ってくると思うけど。」

「あ、いえ、あの。」

ももごと口ごもった私に、「少し厳しいことを言うようだけど……」

「と」

前置きして先輩は言った。

「ハルちゃんも、ちょっと大人にならないといけないのよねえ？」

それには、アタシを通してじゃなく、自分でキチンと向き合うこと。

ココ、重要^{だいじ}。テストに出しますよ？」

ビシッと音が聞こえそうな勢いで人差し指を立てて、少し茶化すように

私に告げた。

その言葉に、脳裏に“2人の喧嘩”などという想像できない出来事の

始まりが浮かんだ。

『希望先輩を通してじゃなく、自分でキッチンと向き合うこと』って
．．。

私が、原因．．？

はじめは疑問形だったその憶測は、駆け巡る経緯^{いきわづ}を整理することで、次第に確信へと移行する。

1ヶ月前の、あの出来事。

この1ヶ月の私。

お昼休みの食堂での出来事。

『．．．早川がらみか？』

きつと、原因は、それだろう。
そうして、別の疑問が浮かぶ。

でも、どうして伊藤さんは、課長に？

頂垂れたままの私を、希望先輩が辛そうな表情^{かお}で見ていたことを、
私は知らない．．。

憶測から確信へ。（後書き）

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。

もうすぐ戻ってくるようですが、喧嘩してどこかへ行ってしまった男性陣2人。

その喧嘩の原因が自分にあると、春陽ちゃんは自分を責め始めているようです。

希望さんには、何かがみえているようです・・・。
春陽ちゃんいもつとのことが不憫でならない“おねえさん”なのでした。

いつも拙作をお読みいただきありがとうございます。

誤字・脱字のご連絡、ご意見・ご感想などなど頂けると全力で喜びます。

（それって、一体・・・？）

今日もここまでお付き合い下さったあなた様に、最上級の感謝を。

諒でした。

気づいたこと。

終業間際に、漸く私は自席に戻った。

この1ヶ月、キッチンと仕事をこなせない状態が続いている。

きっと、課長も、伊藤さんも、呆れているんだ・・・。

あの喧嘩だって、よくよく考えてみれば、私がキッチンと仕事をしないから、

伊藤さんが課長に文句を言いに行ったことが切欠なら納得できる。

もしかしたら、私を自分のチームからはずして他の人を回して欲しいと

言いに行ったのかも知れない・・・。

でも、ここ暫くの営業課は、どのチームも手一杯な状況が続いているから、

回せるような人はいないと課長に断られたのだとしたら・・・。

そうだとしたら、私は・・・。

私の思考は、そこまで行き着くと動きを止めた。

考えるのは、もう少し、待とう・・・。

今は、目の前の仕事を終えなくちゃ・・・。

小さな溜息をつき、そろそろ帰り支度の始まるフロアでPCに向かった。

『これ、申し訳ないんだけど、明日朝イチの会議に間に合わせてね。』
今朝、出勤してくるなりチームリーダーに頼まれていた会議資料のフォームを開く。
一生懸命画面の文字を追うのだけれど、靄がかかったようにはつきりしない。

どうして、私だったの？

課長を避けてたことが、気に障った？

だから、仕返しに、避けるようになったの？

キーボードに置いた手が、微かに震える。

その甲に、パタリと落ちるものに気がついて、私は一度、席を立った。

気分転換にコーヒーでも入れようと給湯室に入ると、さっきの感情がふらふらと舞い戻ってきた。

「あ．．．れ？なんで、私、課長に避けられることを、哀しいと思ってるの？」

思わず口をついて出た言葉に、慌てて口元を押さえ、辺りを見る。

避けてたのは、自分わたしでしよう？

避けられて哀しいなんてこと、ないじゃない？

喜ばしいことじゃないの？

ふうっと吐息を吐き、心を静めようと努める。

私、何で、哀しかったんだろう？

笛つき薬缶ケトルに水を満たし、火にかける。
お湯が沸くまでの間、給湯室のパイプ椅子に身を委ねた。

いつも、フロアの奥から向けられる優しい視線まなざし。
いつも、みんなの中心で笑ってて、誰からも好かれてて・・・。

その視線を向けてもらえるのが嬉しかった。
その笑顔を見られるのが嬉しかった。
あの声が聴けるのが嬉しかった。

・・・それがなくなつて。
それで、哀しかったんだ・・・。

じゃあ、私、何で、避けてたの？
課長と一緒にいられるのが嬉しいなら、どうして、避けたりしたの？
ぼんやりと天井を仰ぐと、胸がチクリと痛んだ。

この1ヶ月、何度、落ち込んだらう？
どうして課長はあれ以来、私のこと、見てくれないんだらう？って。
何度も何度も胸がチクチクと痛くて、息が詰まりそうなくらい苦しくて。

まるで少女漫画に出てくる、恋する主人公じゃない・・・。

「え？恋・・・す、る？」

真横のコンロにかけた薬缶の、あのピーという耳に障る音で、

途切れかけた意識を現実^{コト}に戻される。

コンロの火を止め、薬缶の取っ手に手をかけた。
薬缶の肌で、じゅーと水蒸気が上がる。

「ああ、私、また泣いて・・・？」

泣いているのに、哀しく、ない。
それどころか、嬉しい、と思う。

キュツと噛み締めていた口元がゆるりと綻ぶ。

そっか。

私、早川課長のことが、好きだったんだ・・・。

気づいたこと。(後書き)

一歩、前進・・・といったところででしょうか？

ようやく自分の気持ちに気づいた春陽ちゃん。

さて、ここから順調に進んでいけるのでしょうか？

・・・実は、私にも、わかりません。

最終着地点のイメージは出来上がったのですが、何せ、私のこと。

果たして、無事、たどり着けるのかっ？！(オイオイ、)

；()

本日もここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

そんなあなた様に、最上級の感謝を。

諒でした。

残業中のフロアで。

いつしか営業課のフロアにはすっかり人の気配がなくなり、私は一人、

まだよく見えない目を擦りつつ画面の文字を凝視していた。

「ハルちゃん。」

「うひゃあっ?!」

薄暗くなったフロアで聴こえた突然の声に、私はとんでもない音で
こえ
応えた。

「あはは。だから、色気、ゼロだって、もう...。」

私の左側には、涙目で笑いをこらえる伊藤さんが立っていた。

左頬は少し腫れ、大きな絆創膏が貼られている。

「いと...さん、顔!どうなさったんですか...?!」

「ん?自業自得、ってやつ?」

そう言って笑いながら、私の頭を大きな手でワシワシと撫でた。

「...職務放棄の罰だよ。」

「パワハラ反対っ!!」

伊藤さんの後ろから姿を現した課長そのひとに向けて、私は大声で抗議した。

「パワハラって...。」

「うはあゝ、もうダメ。ハルちゃん、大好きいゝ!」

どこか拗ねたような表情でぼそりと呟く課長の横で、笑いを堪え切れず

お腹を抱えている伊藤さんの言葉に、私は顔が一気に赤くなるのを感じた。

「なっ．．．なんてこと言うんですかっ！伊藤さん、セクハラで訴えますよっ！！」

動揺のあまり握りこぶしまで作ってしまった私を見て、ひーひーと音を立てる

伊藤さんの笑いは一向に収まる気配を見せない。

それどころか、今度は課長まで笑いをこらえきれなくなったようで、今にも

噴出しそうに口元を押さえている。

そんな2人を見た私は私で、何が笑えるほどおかしいのか全く解らずむくれた。

むう．．．。何なんだ、この雰囲気はっ！

．．．ってか、何でこの2人がココにいるのさっ？！

未だ笑い続ける2人を横目に、私はPCに向き直ろうと身体を移動させる。

その瞬間、左腕を強い力で引かれた。

「．．．．．！！」

引き寄せられた着地点は、課長の腕の中だった。

「．．．すまなかった。どうしていいかわからなかったんだ．．．。」

「

苦しげに響くその声に、私は上を見上げ、両掌を伸ばし、そっとその頬に触れる。

私を見つめる哀しげな光を湛えた漆黒の瞳が揺れた。

「遠藤．．．。」

「私のほうこそ、申し訳ありませんでした。課長にお気遣いいただいてしまって．．．。」

遠くでパタン、とドアの閉まる音がした。
気がつくと、さっきまでココにいた伊藤さんの姿がない。

「春陽のこと、いつも見てた。ほんわかした雰囲気なのに、自分に課せられた仕事はキチンとこなしていく。いつも感心してたよ。」
柔らかな微笑^{えみ}を向けながら、課長は私をそつと包む。

その温かさに、私は伸ばしていた手を自分の前に下ろし、目を閉じた。

「入社式の日、エントランスで派手に転んだろ？」

課長は、さっきまでとは違う声色でそう言っ、ニヤリ、と笑って私を見た。

「うぐう．．．！何で今その話？！」

咄嗟に自分の胸の前の手を伸ばし、敵わないと思いながらも抵抗を試みる。

「あの時さ、お前に一目惚れしたんだろうな、俺。ソコソコの成績は挙げてたけど、その頃は、まだペーペーの営業社員でさ。同じ部署に配属されたお前の姿を見て、心底ラッキーだと思った。」

再び見上げたその瞳は真剣で。

ポカポカと課長の胸元を叩いていた手を止めて、私は黙ってその続きを聞いた。

見つめる先の課長は、今までに見たことのないようなキラキラした笑顔で続けた。

「仕事のできるイイ男になって、このコを振り返らせてやろう、そう思った。」

1年間、必死で仕事して、どうにか今の肩書きを手に入れた。気になる女^コが

同じ部署で、俺の部下としてすぐ目の前にいる。毎日が楽しくてさ。

「

そこまで言って、課長の整った顔が苦しそうに歪む。

「．．．なのに、この春から、春陽を別の部署へ異動させようって話が

人事から来てさ。なんだかんだ理由をつけて、今回は妨害できただれど、

また、いつ、その話が持ち上がるかわからない。そう思ったら、俺、どうしたらいいかわからなくなって．．．。本当にすまなかった。」

課長は腕を解いて一歩後ろに下がり、深々と頭を下げた。

「あ．．．の、やめてください。そんな、課長が気になさることじゃないです。

私なんかに謝るなんて、やめてください。お願いします、頭を上げてください。」

私は慌てて課長に頭を上げてもらおうと前屈みになった。

瞬間、くらりと視界が廻り、身体がふわんと揺れた。

「あ．．．。」

．．．私ってば、カッコワルイ．．．。

何故だかそんな感情が湧き上がる。

．．．カーペット敷いてあるけど、やっぱり、きつと痛いよね？

妙な冷静さを覚えた直後、私は意識を手放した。

残業中のフロアで。（後書き）

春陽ちゃん好きなのコが他の部署に異動させられるのが嫌で妨害だなんて．．．

課長、超・我が儘．．． （へ）

．．．って言うか、そんなのが通る会社なんてあるのかっ？！

（ ないよ、フツーは。）

このお話の最終話までの道がなんとなくできてきました。

あともう暫くお付き合い頂けると嬉しいです。

拍手や一言コメント下さった皆様方、アリガトウございました。

そして、今日もお立ち寄り下さったあなた様に、心からの感謝を。

諒でした。

勇気と、革命。

．．．温かい．．．。

ぼんやりとした意識の中で、私は感じた。

ふわふわと私の頭を撫でる優しい掌^て。

耳元で、力強い鼓動が聴こえる。

「．．．うん。」

ゆっくり瞼を持ち上げると、そこは、会議室だった。

課長がソファに座り、私は彼の腕で囲われて、膝の上に乗せられていた。

「．．．ふわっ?!」

その状況に、ぼんやりした意識もしっかり戻る。

「ああ、気がついた?」

そう言つて、私をそっと抱きしめる課長の顔を見た。

「本当にすまなかった．．．。」

眉間にしわを寄せ、薄く締まった口元が歪む。

憂いを滲ませた漆黒の瞳が、私を捉えて離さない。

私は、呼吸^{いき}をすることすら忘れそうなくらい、その瞳に魅かれた。

「春陽．．．。もう一度言わせて欲しい。俺、君が、好きだ。」

射るような鋭くも真っ直ぐな視線に、胸が詰まるような切なさを感じる。

『私で、いいの?』

もう少しで声になりそうなのに、音になって出てこない。

黙ったままじっと見上げる私を、課長はもう一度そっと抱きしめた。課長の鼓動がすぐ側で聴こえる。

その音に応えるように打つ、私の鼓動。

静けさの中居た堪れなくなつて俯くように視線をはずすと、ひんやりと

冷たい親指でそつと頤をすくい上げられ、再び視線を合わせられる。

「春陽．．．。」

真つ直ぐに私を射抜く情熱的な瞳。

薄く整つた唇から零れる、溶かされてしまいそうなくらい熱くて

甘い低音に、ゾクリと身体が震えた。
テノール

「．．．か．．．ちょ．．．?」

「俺じゃ、ダメか?」

眉間をグツと引き寄せ苦しげに表情を歪める課長そのひとを見て、私は息を飲んだ。

なんて、表情かお、するの．．．?

「．．．ダメ．．．とかじゃ、なくて．．．。」

暫くの沈黙を置いて、私は漸く口を開いた。

でも、どう言えはいいかわからない。

このひとは、どんな結果も受け入れてくれるんだろうか?
困惑した視線の先で、課長はふわりと優しく微笑む。

．．．ああ、いつもの微笑だ．．．。

この1ヶ月、私に向けてくれなかった笑顔。
見たくて焦がれた笑顔。

私の大好きな笑顔。

私の大好きな、男性^{ヒト}．．．。

私は両掌^{りょうて}を伸ばし、見上げた先にある頬を包んで、
そっと引き寄せた。

ゆっくりと近づいてくる、驚いたような課長の顔。

「ありがとう．．．。私も、あなたが、好きです．．．。」

私は消え入りそうな声でそう告げたあと、課長の唇に、自分の唇を
静かに重ねた。

．．．ねえ。ちゃんと、聴こえた？

勇気と、革命。（後書き）

ようやくと、ココまで来れたっ！

ラストまで、あとひと踏ん張り、ガンバリマス。
できれば、勢いのあるうちにUPしたいデス（え、願望？）
お時間が許せば、お立ち寄り下さいませ。

今日もここまでお付き合い下さったあなた様に、最上級の感謝を。

諒でした。

エピソード、という名の後日談。(前書き)

今回は、少し長いデス。

すみません・・・切り損ねました・・・。

エピソード、という名の後日談。

突然の告白から1年。

また新しい年度を迎えて、新入社員も配属になり、営業課は相変わらずの雰囲気動いている。

4年目の私は、事務職の新人指導する立場になり、毎日を慌しく過ごしていた。

いつものように祥子ちゃんや希望先輩とランチをとって自席に戻ると、出かける前にはなかった書類が机に山積みされていた。

「課長おっ！何なんですか、この書類の束はっ?!」

「ん? やつといて?」

「やつといてじゃないでしょおっ?! 誰の仕事ですかっ!!」

「ん? 俺の?」

「おゝれゝのゝじゃなゝいいゝっ!」

書類の束を引っつかんで課長席までツカツカと近寄る。

PCを前に、マグカップのコーヒーを啜りながら上目遣いで私を見る課長に向かって、手にした書類を勢いよく突き出した。

「お返ししますっ! キリキリ働けっ!!」

「やゝっぱ、だめかあゝ。」

突き出された書類を受け取りながらクツクツ笑う早川課長。

「あつたりまえですっ! ペーペーの事務員が、課長決済なんてできるわけないでしょうっ?! いい加減にしてくださいっ!」

しつかり書類を受け取らせて私は自席に戻る。

「うふふ。甘あいデザート、ご馳走様。もうお腹いっぱい。今日の3時はお茶だけでいいねえ。」

席に着いた途端、隣の席から祥子ちゃんが小声で話しかけてきた。

「・・・どう見たら、そうなるの？」

溜息をつきながらPCの画面を開く。

「ん、今のはベタベタ・あまあま以外の何物でもないのかと・・・」

「俺も祥子ちゃんに激しく同意。」

「・・・っ！伊藤さんっ！」

前の席から伊藤さんがニヤニヤしながら声を掛けてきた。

「でしょ？伊藤さんもそう思うでしょ？」

「一時期はどうなるかと思ったけどねえ。」

「・・・その話は、宇宙彼方に廃棄していただけませんか、お2人とも・・・。」

「だあゝつて、ねえ。私だって、早川課長に憧れてたんだよね？なのに、あんなの聴かされちゃあゝねえ？伊藤さん。」

「お、祥子ちゃん、気が合うねえ？俺も早川に殴られた甲斐があつたつてもんだよね。」

左頬を擦りながらニヤリと笑う伊藤さんに、尤もだと言わんがばかりに

コクコクと頷く祥子ちゃん。

そんな2人に、私は何も返すことができず、ガクリと頂垂れた。

社員食堂で涙が止まらなくなったあの日。私が希望先輩のぞみに医務室に連れて

行かれてから、伊藤さんは早川課長に詰め寄ったのだと聞かされた。『遠藤春陽のことを、どう思っているのか』と。

伊藤さんからすると、課長のことも私のことも見てられないほどだったらしい。

方や、毎日何かを忘れようとするかのごとく仕事にのめりこみ、方や、普段と

変わらないように取り繕いながら、ふとした隙間で哀しみに暮れた表情をする。

黙って見ているには限界だ、と感じたんだそうだ。

会議室での口論のあと、飛び出した伊藤さんを追って来た課長の煮え切らない

態度に腹を立て、『遠藤春陽を捕まえて置く気がないのなら、オレが貰う』。

伊藤さんがそう言った途端、左頬を殴られたのだという。

「実際のトコロ、オレ、ハルちゃんのこと好きだからねえ。」

突然頭の上から聞こえた声に、私は慌てふためく。

「いとおくさんっ?!」

途端、フロアの奥からあの人の声が飛んでくる。

「ぐおらあ！伊藤っ！！仕事しろっつ！・・・遠藤、ちよつと来いっ！」

「あゝあ、怒られた。」

「へえへえ、嫉妬深い彼氏オトコは怖いねえ。」

祥子ちゃんと伊藤さんが顔を見合わせてクスクス笑う。

私はそんな2人に苦笑いを残し、もう一度課長席に向かった。

「お呼びですか？」

「・・・お前、隙だらけ。どうにかしろ。」

苦虫を噛んだような顔をした課長がそこにいた。

「は？」

「．．．だからっ！．．．いや、いい。言うだけ無駄だ。」

米神を押さえながら首を横に振る課長に、何が言いたいのかが理解できない。

「その堅物はね、簡単に他の男を近づけるなっと言いたいんだよ、ハルちゃん。」

書類を片手に課長席にやってきた伊藤さんは不敵な笑みを浮かべて私を見る。

「．．．っ！慎っ！何回言わせんだっ！仕事しろっ！お前、もいっぺん殴られたいかっ？！」

伊藤さんはいまにも飛び掛ってきそうな勢いの課長を右手で制して「ほれ。」と

手にしていた書類を渡し、カラカラ笑いながら自分の席へ戻っていた。

呆然と伊藤さんを見送り視線を戻すと、優しい目で私を見る課長がいた。

「いまのままの春陽で、変わらないでいてくれ．．．な？」

私の左手が、温かい課長の右手で包まれる。

「はいっ！」

その温かさに、私は課長に微笑んだ。

終業のベルが鳴り、PCの電源を落としたあと、自席の周囲を片付けて

ロッカーへ行こうと立ち上がると、後ろに課長が立っていた。

「お疲れ。ちょっといいか？」

会議室に呼ばれ、その真剣な眼差しに、少し不安を覚える。

お昼間、調子に乗ってあんなこと言っちゃったから、お仕置きとか
．．？

．．だとしたら、どうしよう．．．。

全身の血がさぁと引いて行くような気がした。

「春陽？」

「うわああ、ごめんなさい、ごめんなさい。調子に乗った私が悪かったんです、

ごめんなさい．．．。」

名前を呼ばれ、私は咄嗟に頭を抱えてしゃがみこんだ。

一瞬間をおいて、課長の堪えても堪えきれないような笑い声をする。

「．．．かちよ？どうしたの．．．？」

頭を抱えたまま、そつと上目遣いに課長の様子を窺うと、涙を浮かべて口元を

押さえていた。

「あ．．．れ？怒ってるんじゃないの？」

「何を怒るんだよ？．．．ったく、なあくに勘違いしてるんだ、お前は。あゝ、笑った。」

そう言つて、目尻を拭い、私の手を取り引き上げる。

キョトンと拍子抜けしたまま立ち上がった私を前に、課長は軽く咳払いをして続けた。

「あのさ．．．あれからもうそろそろ１年になるだろ？」

彼は左手をスーツのポケットに手を入れ、右手で私の左手を取る。

「．．．俺と、一緒になつてくれませんか？」

「．．．え．．．？」

私は自分の左薬指に納められたリングと、それを指に通した目の前の男性を交互に見た。

「．．．別の言い方したほうがいいか？」

次の瞬間、私は、真っ赤な顔で照れ臭そうにこちらを窺い見るその人の首に

両手を回し、耳元で囁くように答えた。

「．．．一生、側にいさせてくれる？」

大きな手が私をそっと包んで、私は彼に引き寄せられる。

「もちろん。嫌だといっても、離さない。覚悟しとけ？」

温かい響きと優しいキスが、私の唇に落とされた。

「約束してね？」

「ああ。約束する。」

「絶対よ？」

「心配スナ。俺は、約束を破るような男じゃねえよ。」

その言葉にどちらともなく微笑み、もう一度“約束”のキスを交わした。

夕日に染まる会議室での出来事。
フロボース

．．．後日、社内がこの話で持ち切りになり、伊藤さんが課長の拳骨を

お見舞いされたのは、お約束の小話ということで．．．。

-
F
i
n
-

エピソード、という名の後日談。（後書き）

今回で、このお話は最終とさせていただきます。

見切り発車で書き始めたお話でしたが、どうにかこうにか『完結』を打つことができました（若干、無理やり感が無きにしも非ず・・・）。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。
お気に入りに入れてくださった方、拍手下さった方、
感想・コメント下さった方、最後までお読み下さった方、
すべての皆様に、心からの感謝を。
本当に、ありがとうございました。

では、またお目に掛かれることを祈って。

諒でした。

【番外編？】 いとーさんの、後日談。（前）（前書き）

番外編のつもりでしたが、えらく長くなりました…。

スクロールするのに泣きそうになったので、2分割してみました。
それでも長いのはドボシテ…orz。

【番外編？】 いとーさんの、後日談。（前）

妹のように思ってきた遠藤春陽が、これまた弟のような存在で、且つ無二の（？）親友である早川史弥と付き合いだして、早1年。

オレが煮え切らない史弥をけしかけたのがそもその始まりなんだけれど、

一時はどうなるかと、本気で生きた心地がなかった。

オンナの子に関しては、不器用だ、無愛想だ、とは、常日頃思っていた

けれど、ここまでとは思わなかった史弥。

ちゃんとした告白もなしに、いきなりキスして『俺のオンナになれ』なんぞ、

どこの“俺様”だ！まったく。

遠藤は遠藤で、見ていられないくらいの憔悴ぶり。

あんなに落ち込むとは、予想外だった（いや、その前に、史弥アイツの行動が

想定外だったが・・・）。

ちよつとやさつとじゃ挫けない性格、本人は隠していたつもりだろうけれど、

仕事に対する姿勢からはダダ漏れ。きつと、学生時代は、さぞかし同性から

好かれたことだろう。

それが一切成りを潜めてしまったあの状況には、流石に罪悪感に苛まれた。

史弥には左ストレートを食わされ、藤澤にはここぞとばかりにお灸を据えられたけれど、結果オーライ、ってところだろうか。
うん、きつと、そうだ。

遠藤のあの笑顔がなくなちゃ、仕事のモチベーションが上がらないっつーの。

課長席で視線を合わせて笑いあう2人を見て、オレは自然と目を細めた。

「伊藤さん、何見て笑ってんですか？」

不意に斜め前の席から声をかけられる。その声の主は、オレの視線の先を

確かめて、「ああ。」と腑に落ちたような声を上げる。

「いいですよ、あの2人。」

少しさみしそうな表情を見せる佐々木。

「ハルちゃん、変わりましたよね？なんか、前は、ほわわぁ〜んとして、

守ってあげなくちゃ！って感じのコだったのに、すっかり逞しくなっちゃって。

私、もう要らないなあ…。」

「何、祥子ちゃん、嫉妬？」

少しからかうように声をかける。

「嫉妬って…。確かに、ハルちゃんをあんな風に変えた課長に文句は言って

やりたいですけど。敵わないじゃないですか、私。」

赤い顔をした彼女は、ぷう、と頬を膨らませ、拗ねたように呟いた。

「なあに、祥子ちゃんって、そんなに簡単に諦めちゃう女の子だったの？」

意外な言葉を聞いたオレは、思わず思ったままと口にしてしまった。

途端、彼女はハッと目を見開き、傷ついたように目を伏せた。

「ご…ごめん、あの…。」

「いいですよ。だって、誰から見ても、私はガッツリな女の子ですよから…。」

佐々木は俯いたままそう言って席を立ち、フロアから出て行った。

残されたオレは、目の前のPCに視線を戻す。

…が、非常に居心地が悪く、とても仕事なんてしていられなかった。

10分が過ぎ、20分経つても、佐々木は戻って来なかった。

「伊藤さん、祥子ちゃんがどこに行ったか知ってます？」

遠藤が、心配そうに隣の席に視線を落とし口を開く。

「ん、どこに行く、とは聞いてないなあ…。」

「どうしたんだろ、祥子ちゃん？最近、様子がおかしかったし…。」

「え？」

佐々木の様子がおかしい？

目の前の席に座る心配げな顔を凝視する。

「あ、伊藤さん、気づいてなかったんだ？意外…。」
目を丸くして、遠藤が言う。

「祥子ちゃん、ここ最近、ぼおっとしてることが多くて。少し前の私みたいに。」

「なんか、聞いた？」

「それが、祥子ちゃん、話してくれなくて。ちょっと、悲しいかな

…。」

眉を八の字にし、心底残念そうに遠藤が呟いた。

「オレ、ちよつと探してくる。」

言うや否や、オレは席を立ち、フロアを出た。

社内のあちこちを一つ一つ見て歩く。

なんだか気持ちが悪く落ち着かない。

心の中を掻き乱されるような焦燥感、とでも言えばしっくりくるだろうか？

「なんでだ…。なんで、どこにもいない？」

彼女が立ち寄りそうな場所を覗いては、その姿が見えないことに焦りばかりが募る。

粗方の場所は探し尽くし、最後と思われる屋上への階段の前で、深呼吸をする。

ここにいないければ、社外に出たと考えるのが正解か？

一気に階段を登り切り、ドアノブをゆっくり回して屋上に出る。

「いた。」

フェンスに背中を預け、太陽を遮るものがない空を遠い目で見上げる彼女が、そこにいた。

「祥子ちゃん！」

びくつと肩を揺らし、ゆつくりとこちらを振り返る。

その瞳は真っ赤で、席に戻って来れないことにも納得ができた。

「…オレのせい？」

「いえ、違います。」

即座にキツパリ言い切る彼女の横に、少しだけ距離を置いて座る。

「違いますよ、伊藤さんは、何も。何の関係も。」

俯く彼女に、どうしていいか、わからない。

「…私の、弱さ、かな。」

小さく聞こえた声に、もう一度隣を見る。

「頑張っても、頑張っても、どうにもならなくて。」

「祥子ちゃんは、頑張ってるよ？仕事だって、ちゃん…。」

「そうじゃなくて。」

俯いていた彼女が顔を上げた時、ズキリと胸が痛んだ。

「仕事じゃなくて。あのね、伊藤さん。一応、それでも、年頃のオ
ンナのコ、

なんですよ？私も。」

「なん…。」

「抑えても、抑えても、復活してくるんです。私、それでも、これ
までは

諦めのいい方だったのに。弱くなっちゃったあ…。」

「祥子ちゃん…。」

史弥のことを言っているのか？

彼女の叶わぬ憧れを哀しく思うとともに、ジリジリと妬けるような
感情が起こる。

「すみませんでした。ご心配、おかけしました。もう、大丈夫だと思
います。探しに来てくれて、ありがとうございました。もう、
戻りますから、先に行つてくれますか？」

儚げな微笑みを浮かべて、一気に彼女が告げる。

「本当に？」

「私は“強い子”ですから。」

「…無理すんなよ。」

「え？」

「時には、我慢せずに誰かに頼れ。思いのままに行動しろ。ま、他人様に

迷惑をかけるのはもつての外だけだな。」

左手を伸ばして、豆鉄砲を食らった鳩のような顔の佐々木の頭を抱え込む。

「“強い子”も好きだけど、“おにーちゃん”としては、時には頼って

欲しいもんなんだよっ。」

「だっ…誰が“おにーちゃん”なんですかつ！」

「ん？オレ？」

「しかも、自分で言っというて、なんで疑問形っ?!」

「さあ…なんでだろうね？」

少しとぼけたように返すと、腕の中の肩が小刻みに震えているのが見えた。

「おい…どうした？」

心配になって声をかけると、キッと睨み付けるような視線とともに怒鳴り声が響いた。

「伊藤さんのバカっ！」

左頬にピシヤリと痛みを残して、彼女はオレの腕の中からバタバタと走り去った。

【番外編？】 いとーさんの、後日談。（前）（後書き）

ご無沙汰しております。

本編完結より、早12日。

その間にも、毎日、足をお運びくださる方がいてくださいます。
本当に嬉しい限りです。

このあと、後編も宜しければお付き合ってくださいませ。

いつもありがとうございます。

このページを読んで下さるあなた様に、最上級の感謝を込めて。

諒でした。

【番外編？】 いとーさんの、後日談。(後)(前書き)

もう一息、お付き合いただけると、尻尾ふりふり喜びます。

【番外編？】　いとーさんの、後日談。（後）

昼休憩の医務室。

屋上から営業課のフロアに戻る途中でバツタリ出くわした藤澤に、
「慎ちゃん、その顔、何？！」と医務室に連れ込まれた。

「んも、慎ちゃん、なにやってんのよあ。」

藤澤が、呆れ顔でオレの左頬に冷却シートを叩き付ける。

「いッ！？痛えな、もつと優しくしろよっ！」

「バカ言ってんじゃないわよ。こうして手当してもらえるだけでも
ありがたいと思いなさいっ！」

「大きなお世話だ！…ったく、なんだってんだよ、どいつもこいつ
も！」

腕組みをして苦虫を噛んだような顔をした藤澤が口を開く。

「早川君と同レベルね、慎ちゃん。」

「はあ？」

「もうっ！反省しなさいっ！何が切っ掛けでこうなったのっ！」

「ん…ハルちゃんが変わったって話して、オレが嫉妬してんの？
って言って。」

「で？」

「祥子ちゃんは違っって屋上へ上がったって。」

「で？」

「諦めたくても諦められない、って言うから、辛いなら我慢しないで
“おにーちゃん”に頼れって。」

「“おにーちゃん”って誰？」

「オレ？」

「…バカ。」

「なんでさ？オレにとつちや、妹みたいなもんだろっよ？」

「だからバカって言ってるのよっ！」

「なんだってんだよ？オレにはさっぱりわかんねーよっ！」

ハブを睨むマンガースのような目つきで、藤澤はオレを見る。

「祥子ちゃんにも、想い人がいるってことくらい、わかんない？」

「だから、話、聞いてやる、って言ってるんだよ。…ただ、今じゃ、話、聞いてやったところで、叶わないんだろっけど…」

「は？」

「祥子ちゃんの想い人は、史弥だろうよ？アイツにはハルちゃんがいるじゃねえか。だから…」

情けない声でそこまで言っていると、藤澤は盛大に噴き出した。

「な…なんだよ？てか、お前、笑いすぎ。」

「…はあ、笑わせてくれるわねえ？勘違いもイイところよ、慎ちゃん。」

「何が？」

「確かに、祥子ちゃんは早川君に『憧れて』はいたけれど、恋愛対象じゃなかったんだって。」

「なんだそりゃ？」

「乙女にしかわからない気持ちよっ！」

「…めんどくせえ。」

オレは不貞腐れて藤澤を睨み付ける。

「いい？もう一回、初めから言うわよ？まず、祥子ちゃんには、イイな、と

思っている男性がいます。」

「うん。」

「早川君のことはキヤーキヤー言ってたけれど、あくまでも『憧れ』の

対象で、恋愛の対象ではありませんでした。」

「…うん。」

「イイなと思う男性は早川君じゃないのに、その人を諦めようとしています。」

「…うん？」

なんとなく引つかかって、首をかしげて呟く。

「なんで、諦めきれないのに、相手に言わねえんだ？」

「お、そこにきたか。じゃ、聞くけど、慎ちゃんがこの状況ならどう？」

どうして言わずに諦めようとする？」

「…そいつに相手にされないとか、あとは、好きな人がいる時とか…？」

「そこまで出でて、わかんないかな？」

「祥子ちゃんのソイツには、好きなヤツがいるってことか？」

「もしくは、祥子ちゃんが誤解してるか、ってところかな？」

「なら、尚更…！」

言いかけた途端、藤澤の右拳が天から降ってきた。

「おまつ！ 痛えじゃねえかつ！」

「聴いて欲しくても、できないことだってあるの。」

真剣な目の藤澤に、思わず目を逸らす。

「お願いだから、自分のことを“おにーちゃん”なんて言わないであげて。」

藤澤の一言に、一瞬、息を飲む。

まさか…？

「慎ちゃん、貴方は他人の心をよく解ってあげられる人。だから、アタシはこれ以上言わない。じゃ、アタシ、お昼行くね？」

そう言って引き戸を開け、医務室を出ようとする背中に声をかけた。

「：藤澤。」

「ん？」

振り返った藤澤に、にやりと笑いかける。

「ありがとな。」

「フフ。今度、飲みに連れて行きなさいよ、奢りで。」

「ふん、上等じゃねえか。」

「頑張つてね？」

「おう。」

「じゃ。」

ひらっと右手を振って、彼女は医務室を後にした。

今日の午後は後輩の営業社員についての得意先回りだった。

藤澤が貼ってくれた冷却シートのおかげで、左頬はさほど腫れることなく、無事予定を終え、終業時間前に社に戻る事ができた。ま、出掛ける前に、後輩社員には「どうしたんすか、伊藤先輩？」と若干心配しては貰ったが。

午後から佐々木は自席で通常通り作業していたようで、オレが帰社したことに気付くと、PCからちらつと眼を上げて「お疲れ様です」と言っていた。

正面の遠藤はその様子に、オレに苦笑いを向け、心配そうに視線を隣に移していた。

席についてPCのロックを解除し、モニターを立ち上げる。

業務連絡のメールの中に、1通、様子の違うものが届いていた。

佐々木？

『さつきはすみませんでした。カツとなってしまつて、思わず手が出てしまいました。ごめんなさい。でも、ホントにもう大丈夫です。ご心配おかけしました。』

仕事のメールそっちのけで開いたその文面は、なんとも他人行儀で、思わず顔が歪む。

どうしても気が晴れず、しつこいのは重々承知の上でそのメールに返信する。

『ちよつと聞きたいことがある。今日、残業になりそうか？少しの時間でいいんだけど？』

斜め前の席で、肩がピクリと動く気配がした。

気づかぬふりをして業務連絡のメールをチェックしていると、新着メールの通知ウインドウが立ち上がり、いそいそと開封する。

『少しだけなら、大丈夫です。終わったら、屋上で待ってます。』

オレは、チェックしていたメールを放っぽって、了承のメールを返信した。

勘違いでなければ、いいのに…。

小さく息を吐きながらフロアの壁掛け時計を見ると、就業時間まであと10分。

今までに感じたことがないくらい、長い10分になりそうな予感があった。

就業時間を知らせるチャイムがいつものように鳴り響き、息の詰まる10分を、

どうにかこうにかやり過ごした。

ふと顔を上げると、遠藤と佐々木は連れだってフロアを後にするのが見えた。

「おい、伊藤。」

背後から史弥の声が聞こえる。

「ん？」

「どうした？何か、あったか？」

「ん？なんで？」

素知らぬ顔をして答える。

「いや、何もなければいいんだけど……。」

「ん。ありがとな。」

オレは史弥の方を振り返り、にっと笑いながら親指を突き立てる。

「ん。じゃ、先、帰るわ。お疲れ。」

「おう、お疲れ。」

スーツの上着を肩にかけ、スツと手を挙げてフロアを出ていく史弥の背中を、

座ったまま見送った。

終業時間から10分ほどして屋上に上がると、佐々木が暮れかけた空の下で

待っていた。

「すまん、遅くなった。」

「いえ。話ってなんですか？」

一緒なのが気まずいのか、用件を早く済ませて帰りたい様子が手に取るように

感じられる。

やっぱり、自惚れ、だったのかな？

「今日、さ。ごめんな？」

目の前の佐々木は、少し吃驚したような顔をした後、俯いた。

フェンスにもたれかかり、眼下の街並みを視界に入れる。

「その…なんか、辛そうだったから、さ…。」

「…もう、いいんです。だって、無理、なんだもん。」

「なんで、そう思うの？」

「…いつも視線の先には、その人がいるから。」

振り返ると、ぽつんと立ちつくした彼女の肩が震えている。

「私は、その人の、代わりには、なれない…。」

「しょ…。」

「隣にいても、その人を見て笑ってる…。諦めなくちゃって頑張っただけ、

でも、やっぱり無理で、でも、どう頑張っても、その人は…。」

彼女の足元のコンクリートが、落ちてくる涙を吸い込んでその色を変えていく。

「お…落ち着け、祥子ちゃん。整理して話そ？な？」

「いと…伊藤さんのばかりあつ！なんで“おにーちゃん”なのよ…。」

膝を抱え込んで子供の様に声を上げて泣く彼女の隣に立ち、その頭をふわふわと撫でた。

「しょーこちゃん？ちよーつと早とちり、してるよ？」

グズグズと鼻を鳴らしながら顔を上げた彼女を見て、なんだか可愛いと思うのは、

オレだけだろうか？

ポケットからハンカチを取り出し、半分取れかけたメイクを気遣いながら、そつと

涙を拭ってやる。

「その人のことはね、妹のようにしか思っていないんだよ？初めっから、恋愛対象

じゃ、ないんだ。わかる？」

呆けた顔でオレを凝視する彼女の前髪をかき上げ、おでこにそっと唇を落とした。

「オレが好きなのは、キミなんだよ？」

「ひえ？」

愛しい人は、涙を湛えた目を今にも落ちそうなくらい見開き、何とも間の抜けた

音をその口から発した。

その音の可笑しさに、思わず嘖き出す。

「くはっ、何？その音。」

「…だ、だって。ずっと、ハルちゃんばかり、見てたじゃない。

それも、

すっごく愛おしそうに。だから、私、伊藤さんは、ハルちゃんのこと

とが、好き

なんだとおも…。」

そつと頬に手を添え、目の前にある、必死に言葉を紡ぐその唇を塞ぐ。

「…ハルちゃんは“妹”。さっきも言っただしょ？」

「うぐ…でも、今日だって…。」

「そりゃあ、あの2人のことは、正直言っ、悪かったなって思ってたから。

なんたつて、どこぞの“俺様”をけしかけたのは、オレだったし…。

「

「え？あの2人の、伊藤さんが発端だったの？」

「ん、早川がブスブス燻ってたところに着火剤放り込んだって感じ？」

「…それは、罪悪感、感じちゃうわね…」

「だろ？だから、よかったなあ…って、見ちゃうわけよ？羨ましいなあ…って。」

「う…羨ましいって…。」

「だあって、オレだって、オレの好きな子は燻^{くも}ってた俺様のことがいいんだと

思ってたんだから。」

「あ…。」

両手で口元を覆い、頭先从湯気が出そうな勢いで首まで真っ赤になる彼女。

「でも、勘違いは、お互い様、かな？」

彼女の両手をそっと握って下に下ろし、もう一度、啄^くむようなキスを落とす。

そうして、すう、と息を吸い込み、自分の腕の中にいる愛しい人に、改めて

想いを告げる。

「…一緒に、いてくれる？祥子？」

いつしかすっかり日が暮れて、宇宙^{そふ}には小さな星が散りばめられていた。

F i n

【番外編？】 いとーさんの、後日談。（後）（後書き）

いつもありがとうございます。

完結済みにしても、訪れてくださる方や、お気に入り登録を解除せずにいてくださる方、拍手をくださる方、コメントをくださる方がいてくださって、本当に感謝しております。

でも、この話については、もう書くことはないと思います。

（要は、ネタ切れでしょうか…？）

でも、もしかしたら、書くかも？

（ どっちゃねん！ ｾﾞｯ ｾﾞｯ ）

ここまでご覧いただき、本当にありがとうございます。

またお目にかかれることを祈って。

お忙しい時間を割いてお付き合いくださったあなた様に、最上級の感謝を。

諒でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4830s/>

彼女の恋愛革命。

2011年5月17日21時38分発行